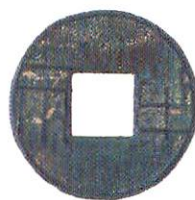


# 中国貨幣の歴史

## 9 漢～隋代の基本貨幣「五銖錢」の誕生 —前漢中期以降の貨幣—



「三銖」錢



有郭四銖「半兩」錢



「五銖」錢

前漢が最盛期を迎える武帝時代、「三銖」錢や有郭四銖「半兩」錢の発行などの試行錯誤を経て、漢独自の貨幣である「五銖」錢が誕生する。「五銖」の銘文のほか、大きさや周囲に縁取りのある方孔円形の形態は、唐の開元通宝が誕生するまでの700年余にわたり、中国貨幣の基本型となっていく。

前漢初期からの貨幣流通の混乱は、前漢中期の文帝時代に、重さ「四銖」の「半兩」錢の鑄造を民間に認めることで収拾された。続く景帝時代の前漢は、呉楚七国の乱（紀元前154年）平定を契機に政治的支配を強化し、主要銅山を中央政府の配下に収め直轄の鑄造機関を設置するほか、民間の錢盜鑄者等を処罰する法律の整備などにより貨幣統制を強化し、中央政府による銅生産、鑄錢体制を整備していった。

最盛期を迎える武帝時代の前漢は、国内では中央集権的専制支配体制を固め、対外的には漢王朝成立以来の和親政策を転換した。南越などを制圧し領土を拡大する一方、北方の匈奴との対立は激化し、相次ぐ遠征により国家財政は窮乏した。前漢の財政は、軍事費等の公的支出を担う国家財政と宮廷費等皇帝の私的支出を担う帝室財政に二元化されており、国家財政の支出は帝室財政にストックされていた禁錢（皇帝の錢）の一時的な支出により賄われた。しかし、一時的な支出補填では国家財政の強化に至らなかったため、塩・鉄に係る帝室の税財源を国家財政へ移管し、塩・鉄を専売制とするとともに、物資流通と物価の安定を図る「均輸・平準制」を組み合わせることで、塩・鉄の生産から販売までを独占し莫大な収入を確保した。なお、帝室財政では、財源補充のため銀（＝「白金」）や白鹿の皮（＝「皮幣」）の貨幣を発行し、一時的ながら一定の収入を確保したとされている。

武帝時代の錢貨については、武帝即位（紀元前141年）の翌年、軽量な「三銖」錢（約2g）を発行した。「三銖」錢は、四銖「半兩」錢（約2.6g）の鑄直しによる改鑄益の確保を企図した錢であったため、私鑄による軽量な悪錢の横行と物価騰貴を招き、わずか数年で発行が停止され、再び四銖「半兩」錢が発行された。この四銖「半兩」錢は、錢の周囲が削り取られるのを防ぐため縁取り（＝「外郭」）が取り入れられたため、「有郭四銖半兩錢」と呼ばれる。その後も悪錢の流通が進行したため、武帝は、塩・鉄の専売制確立後の紀元前118年、それまでの四銖「半兩」錢より重い漢独自の貨幣「五銖」錢を発行した。「五銖」錢の発行に際し、改鑄による漢財政への新たな負担を回避するとともに、私鑄を禁止し、政府による鑄造体制を維持するため、直轄郡と王国（＝「郡国」）による鑄造体制を敷いた。鑄造を担わされた郡国の負担は小さくなくなったとされるが、郡国による鑄造によって大量鑄造、供給が可能となり、四銖「半兩」錢からの切り替えが進むと、紀元前113年、郡国による鑄造を禁止し、中央政府の鑄造機関である「上林三官」に「五銖」錢の鑄造を集中させ、中央による独占鑄造体制を確立した。

こうして誕生した「五銖」錢は、五銖の重さ（3.25g）よりかなり重い4g前後の重量ゆえに貨幣としての信用を獲得したとされ、唐の開元通宝が登場するまでの700年余にわたり、大きさや形態面で中国貨幣の基本型としての地位を維持していくこととなる。

〔山岡直人、日本銀行金融研究所貨幣博物館〕

#### 【参考文献】

- 彭 信威、『中国貨幣史』、上海人民出版社、1965年  
加藤 繁、「西漢前期の貨幣 特に四銖錢に就いて」、『支那經濟史考証』上、東洋文庫、1952年  
——、「三銖錢鑄造年分考」、『支那經濟史考証』上、東洋文庫、1952年  
佐原康夫、「漢代貨幣經濟論の再検討」、『中国史学』4、1994年  
山田勝芳、『貨幣の中国古代史』、朝日新聞社、2000年  
山岡直人、「中国貨幣の歴史6秦の貨幣統一①—戦国時代の秦と貨幣—」、『金融研究』第23巻第2号、2004年  
——、「中国貨幣の歴史7秦の貨幣統一②—秦の貨統一とその実態—」、『金融研究』第23巻第3号、2004年  
——、「中国貨幣の歴史8「半兩錢」による貨幣統一—前漢初期の貨幣—」、『金融研究』第23巻第4号、2004年